リード芦屋新聞

発行元
芦屋市立
あしや
市民活動
センター
リードあしや

記事
吉原大翔

40年以上の相棒と

リードあしやで10月2日、子供たちのためのイベント「あんあーと」が開催された。このイベントに参加した、劇団あおぞらドラマカンパニーで脚本家、俳優として活躍する前田伊都子さん（62）。劇団で活躍する一方、子どもたちのために芦屋市で紙芝居を読み聞かせる活動をしている。紙芝居の活動を始めてから40年以上が経つ今日、どのような思いで活動をしているのかを取材した。

前田伊都子さんと紙芝居

子供だけでなく保護者も

流れる時代、受け継がれる物語

前田さんが読み聞かせをする紙芝居の種類は豊富で、40から50本を所有している。学校の図書館においてある教育紙芝居や、本屋さんで簡単に購入できるもの、ロングセラーの作品などが数多くある。そのため、子どもたちだけでなく保護者も楽しめるようになっている。

紙芝居の中には、幼稚園や小学校生に向けた昔話や起承転結がわかりやすい作品のほか、中学生向けの沖縄戦関係の作品もあり、ジャンルの幅広さに驚かされる。開催されるイベントによって作品を変えるだけでなく、その時の会場の状況に応じて作品の変更をするため、多くの紙芝居を持ち歩いている。

今回のこのイベントでは、『ご機嫌の悪いコックさん』『おおきくおおきくおおきくなあれ』『たべられたやまんば』など計4作品を紹介していた。紙芝居の途中で子どもたちと作品を通じた交流することで、子どもたちの視線を紙芝居に集中させ、一体感を持って紙芝居が進んでいった。

子どもの頃に演劇を始め、現在も芝居を続けているという前田さん。その前田さんには、ジュンク堂書店に勤務していた時期があった。

勤務をしていた書店で開催された「子供の本のフェスティバル」というイベントをきっかけに、紙芝居についての勉強を本格的に始めた。そこから40年以上、紙芝居に関する活動を続けているといい、人生の半分以上を紙芝居と共に過ごしている。

前田さんは紙芝居を読み聞かせる活動をする中で、子どもたちと関わる際には、始める前に心を通わせる行動をするよう心がけているという。今回のイベントでも子どもたちと手でリズムをとるなどしてコミニケーションを取ってから作品に入っていた。

子どもから保護者まで幅広い世代の人たちに紙芝居や演劇を通して大切なことを伝える前田さん。やりがいを感じることを尋ねると「子供たちや保護者の方が年齢関係なく集中して真剣に紙芝居を聞いてくれているときです」と語ってくれた。

青い空に絵をかこう

阪神・淡路大震災から学んだ経験

紙芝居以外の活動としては、子どもの頃から続けている芝居の他に、朗読劇の脚本作りという活動がある。

「青い空に絵をかこう」という前田さんが書いた朗読と演劇を一体化させた朗読劇と呼ばれる作品は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被災の教訓を伝える内容。震災を知らない人に当時の様子を伝えていく責任を感じているといい、芦屋市の中学生を中心にこの朗読劇を披露している。

2011年3月11日、東日本大震災発生のわずか4カ月前に東北地方の人が、この朗読劇を演じてくれた縁があり、宮城県仙台市の人たちと今でも交流を続けているという。

「阪神・淡路大震災で被災し、家が全壊して一度は芦屋市外に避難したが、やっぱり芦屋から離れられないと強く思った」といい、「規模の小さい街だからこそ伝えたいことが伝えられ、小学生のころからよく物事を考えているこの芦屋市で活動できることは幸せです」と語った。

この芦屋市の中で一番好きな場所は芦屋川だという。春は桜が咲きほこり、夏はホタルが飛び交う。